

進藤流初代久右衛門忠次について

表 ぎよし

ワキ方進藤流は、明治時代末に廃絶したものの、江戸時代初期から幕末に至るまで観世座の主脇であった。始祖は寛永十二年（一六三五）に八十三歳で没した進藤久右衛門忠次で、彼は京都の町人だったが、観世小次郎元頼の弟子で手猿楽の堀池宗活にワキを習い、能役者として活動するようになった。その久右衛門がどのような経過をたどって観世座の主脇としての地位を獲得していったのか、彼の出演記録をもとにしながら考察してみたい。

管見に入った久右衛門の最も早い出演記録は、文祿二年（一五九三）四月二十六日の聚楽広間での豊臣秀次主催能である。この日久右衛門は秀次の（鞍馬天狗）と下間少進の（藤戸・自然居士・海人）のワキを勤めている（大倉源次郎氏蔵『小鼓大倉家古能組』。同書によれば、この年久右衛門は十月十八日の前田玄以邸での能、十月二十九日の聚楽での能、十一月七日の曲直瀬道三邸での能などに出演し、豊臣秀次・織田常真・下間少進・春日大夫・

金春大夫・虎屋立巴などの能のワキを勤めている。虎屋立巴は下掛り系統の手猿楽、下間少進は金春流、豊臣秀次は少進に指導を仰いでいるから、主として金春系統の素人の能に出演していることになる。上掛りのワキを習った久右衛門が初期の頃に下掛りの能のワキを盛んに演じているのは、注意すべき現象であらう。

その進藤久右衛門が観世座付となった時期については、慶長八年（一六〇三）とする説が多い。これは『猿楽伝記』の進藤に関する記事に「観世大夫、是を引廻し、毎度、我能の脇をさせ、上洛の時、二条の御城にて御能の時、申立、大臣脇を勤させけるに、其芸能く出来て、御旨にも相叶ふ。……是より、芸、益募り、観世座の脇の家と定りたり」とあるのに基づき、その二条城での能を慶長八年の家康將軍宣下祝賀能と推定しての説らしい。しかし、この時の三日間にわたる宣下能で久右衛門が出演した十三番のうち、観世のワキ

を勤めたのは三日目の（天鼓）だけで、他はすべて金春のワキである。この時に久右衛門が観世座付となったとするのは無理であろう。もっとも、慶長四年の観世大夫身愛（黒雪）の聚楽劔進能にも久右衛門は出演しておらず、慶長八年の宣下能の（天鼓）が観世の能のワキを演じた最初の記録ではあるらしい。

その宣下能を契機とするかのように、慶長九年以後、久右衛門と観世との関係が深まっていく。家康將軍宣下祝賀能で久右衛門の実力を認めた観世黒雪が、自身の能のワキを久右衛門に依頼するようになったのであろう。同年三月二十七・二十八日の女院御所での観世演能の際には、久右衛門は福王神介・山科弥右衛門らとともにワキを勤め、二十三番中八番に出演している。翌年七月七・八日の伏見城西の丸での観世演能の時も、半分以上の曲のワキを久右衛門が勤めている。しかし、慶長十年五月伏見城での秀忠將軍宣下能では、初日の四座立合能には出演しなかったが、二・三日目（観世・金春）には両座の能のワキを演じているし、慶長十一年八月の京都における家康主催の能でも同様である。これらの催しでは、観世座脇の福王や金春座脇の春藤は他座の能に出演しておらず、彼らに比較して進藤は自由な立場で活動していたらしい。

慶長十二年一月七日から三日間、江戸城移

徒祝儀能が行われ、その際に能役者に対して將軍秀忠から金銀が下賜された。『当代記』は役者名と拝領額を列記しており、久右衛門も金三枚を頂戴している。ところがこの時の番組を見ると彼は一番も出演していない。にもかかわらず、大夫を別にすると最も多額の金を貰っている（春藤六右衛門や福王神介は金一枚）。久右衛門が江戸に来ていながら出演しなかった理由は不明ながら、彼が特別扱いされていたらしいことがうかがえる。翌月には江戸城本丸と西の丸の間で観世・金春による四日間の勸進能が行われているが、これにも久右衛門は出演していない（ただし『能楽盛衰記』所収の番組では久右衛門も出ているが、この番組は他の番組類に比し役者や狂言の曲名に異同が多く、信憑性に問題がある）。この勸進能を終えての帰途、観世・金春大夫が駿府で家康から金を下賜された記事が『当代記』に見え、この時も久右衛門は座付役者でもないのに、大藏弥右衛門・長命甚六・鷲仁右衛門とともに金一枚を貰っている。江戸まで下ったことに対する慰労といった意味も考えられるが、久右衛門が家康や秀忠にかなり厚遇されていたことは確かであろう。

以後も久右衛門は江戸や駿府で盛んに活動しており、観世や金春など様々な役者の能に出演しているが、特に注目されるのは下間少

進や常陸主（徳川頼宣。家康の十男で紀伊徳川家の祖）の能のワキを多く勤めていることである。久右衛門が役者として活動を始めた頃からの少進との縁がずっと続いていたことが推測される。また家康が溺愛した常陸主の能のワキを演じていることは、家康が久右衛門に対して好意的だったことを示している。

慶長後半から久右衛門の観世の能への出演はますます多くなるが、脇能のワキを勤めたのは依然として福王であった。元和に入ると久右衛門が観世の脇能に出演する例が見えてくるが、進藤と福王の立場が逆転するのは寛永二年（一六二五）以後である。この年福王二代目の神右衛門（神介）が六十六歳で没し、後継者の佐太夫はまだ十七歳であった。一方、進藤では久右衛門の養子の権右衛門（久右衛門の弟）も活発な活動を始めており、そのため観世の演能におけるワキの大半を進藤が勤めるようになった。寛永四年に佐太夫が十九歳の若さで没してからは、観世座のワキの主流は進藤に移ったと見られる。このような経緯で観世座にとって欠かせない存在となるに及んで、進藤は観世座の中に組み込まれていったのではなからうか。

（国士館短期大学講師）